話 題

平成 26 年度日本水産学会春季大会開催記

川合祐史

北海道大学大学院水産科学研究院

YUJI KAWAI

Faculty of Fisheries Sciences, Hokkaido University

はじめに

平成 26 年 3 月 27 日から 31 日まで、構内に雪が残る北海道大学函館キャンパスを会場に平成 26 年度日本水産学会春季大会が開催された。研究発表の演題数 836 題（口頭発表 579 題，ポスター発表 257 題），そのほか，会員以外にも公開されるシンポジウム企画委員会主催のシンポジウム 2 件，ミニシンポジウム 3 件，水産環境保全委員会主催のシンポジウム 1 件，企画広報委員会主催勉強会 1 件，漁業懇話会講演会 1 件も開催され，海外からの研究者や非会員も含めて総参加者は 1100 名を超え，活発な討論が行われた。同時に水産・海洋に関する「高校生による研究発表会」も開催され，全国から 23 校，100 名近くの生徒と引率教員が参加し，29 題の研究発表が行われた。また，新たな学会活動として，「水産学若手の会」が全国規模で設立され，第 1 回総会が催された。ここでは，運営側から大会を観察して気づいたことを記録に留めておきたい。

大会運営

函館キャンパスにおける大会開催は，平成 19 年の秋季大会以来なので 7 年ぶりである。函館では過去に秋季大会の運営は何度か担当したことがあったが，春季大会の担当は初めてである。春季大会は会期が長く，発表件数，参加者数が多いばかりでなく，総会や各種委員会の開催はじめ関連イベントも多いため，初めて対応する内容も多かったが，前回担当大会の運営スタッフの多くが現職であり，今回も頼もしい力となったほか，本部役員と事務局スタッフ，申込み事務委託先のトーヨー企画スタッフの強力なサポートもあり，比較的円滑な運営ができた。また，昨年度春季大会を運営された東京大学の岡田 茂先生から，大会運営についてアドバイスをいただいたほか，平成 22 年度に日本大学藤沢キャンパスで開催された大会運営マニュアルを大いに参考にさせていただいた。例年の大会のように，関東支部から大会運営グッズ一式を貸与いただき，運営負担の軽減に多に役立った。

大会運営に際しては，大会委員長 嵯峨直恆，副委員長 飯田浩二のもと，当キャンパスを拠点とする水産科学研究院と北方生物圏フィールド科学センターの教員に

写真 1 嵯峨直恆大会委員長挨拶（会員交歓会にて）

よる実行委員会を組織した。メンバーは，総務担当 川合祐史，庶務担当 尾島孝男，工藤秀明，会計担当 酒井隆一，藤田雅紀，藤森康澄，会場担当 澤辺智雄，細川雅史，清水宗敬，編集担当 東藤 孝，向井 徹，足立伸次，協賛展示広告担当 平石智徳，高校生発表担当 今井一郎，交歓会担当 岸村栄毅，山本 潤，笠井久会のほか，プログラム編成や当日の受付，発表会場や交歓会の担当には，清水 晋，松石 隆，山下成治，浦 和寛，井尻成保，平松尚志，藤本貴史，三上浩司，中谷敏邦，水田浩之，高津哲也，三谷曜子，井上 晶，栗原秀幸，山崎浩司，埜澤尚範，John Bower，桜井泰憲，今野久仁彦が加わった（敬称略）。その他にも，多くの教員，事務職員から直接的，間接的協力をいただいた。

3 月末は学生の就職活動においても重要な時期にあたるため，修士課程の大学院生の大半が当地を離れている状況であり，受付や会場などの補助アルバイトは，大学院進学が決定している 4 年生を中心に構成された。それでも十分な人数の確保が容易ではなく，口頭発表の進行担当ではほとんど休憩時間がとれない会場もあった。しかしながら，初めての学会参加で大会運営側のスタッフとなるなど，学生にとっては貴重な経験になったと思う。

大会日程と会場の確保

本大会の開催にあたり第一に開催日程と会場の確保から検討を始めた。本キャンパスでは 3 月 26 日に卒業式が催されるため，春季大会の会期を 3 月 27 日から 31 日までの 5 日間とした。例年のシンポジウムの開催は，半日のミニシンポジウムが初日，全日のフルシンポジウムが最終日となっている。年度内に遠方に帰着する必要がある参加者の事情を考慮し，年度の末日にあたる

写真2 ポスター発表

31日は午前中にミニシンポジウムを配置して昼までにほぼ全日程を終えるスケジュールとし、初日に全日のシンポジウム、講演会、勉強会などを配置することにした。

大会開催に当たり最大の懸念事項は講演会場の確保であった。本キャンパスでは昨年から建物の大掛かりな耐震改修工事が始まり、一足早く講義棟は新装されていたが、メインビルの管理研究棟の工事は始まったばかりで、会場確保の面で大会開催の実現性を疑問視する声が少なからず聞かれた。そこで、本大会では使用会場数を最小限にし、コンパクトに開催することを前提とした。例年春季大会では11～12の講演会場が用意されていたが、本大会では講演を10会場以内で賄うことを原則とし、主会場の講義棟で7会場、別棟の講義室と大会議室、オープンスペースで3会場を用意した。ポスター会場として予定した体育館は、当初校舎改修工事に伴う物品置き場として使用される可能性があり、大会で使用できないことも想定されたため、隣接の中学校の体育館を借用することや市内のホテルを会場とすることも検討した。しかし、最終的には体育館が大会会場として使用可能であるとわかり、大いに安堵したと同時に、この段階で大会の開催が初めて現実味を帯びた。

発表申込みが締め切られてみると、口頭発表演題数が比較的少なく、10会場で十分に賄うことができ、その他、ポスター発表・展示1会場（体育館）、休憩室2室、託児室1室、会議室3室を用意した。本部・大会事務局/来賓（名誉会員）控室には研究院長室、役員室を当てた。なお、会議室として適当な大きさの部屋が限られているため、口頭発表会場と共用せざるを得ず、部屋のレイアウト変更のため会場担当は早朝から夜遅くまで対応することになった。

また、会場や日程、イベント、訂正事項などの案内のため、液晶ディスプレイによる電子案内板を受付ロビーと管理研究棟ロビー、マリンスイエンス棟、およびポスター・展示会場となる体育館に配置した。受付には「無

写真3 電子掲示板による総会案内

線 LAN ゲスト ID 配布所」を設け、本学の情報ネットワークの規定に則り、参加者のインターネット利用に配慮した。

発表申込みとプログラム

プログラム編成と座長の選任には、実行委員以外に当該分野に関係する教員も参加した。しかし、予想よりもプログラム編成作業に時間がかかり、また座長の確定が一部で難航したことから、講演要旨の発送が遅れ、座長予定者に心配をかけることもあった。また、座長依頼メールに講演要旨が添付されると諾否の判断材料になり、また郵送による未着や延着の問題も解決できるので考慮されるべきであろう。発表プログラムに関しては、2演題同時に登録したにも関わらず、発表順が連続になっていないとお叱りを受けることがあった。しかし、2演題同時登録がそれらの連続発表を保証するものではなく、ストーリー性を重視するような場合の連続発表や順序の指定など、別途申込み事務局に知らせるとよい。可能な限りそのような要望には沿うようにプログラムの編成を行った。

プログラム集と講演要旨集は冊子体として印刷される。プログラム冊子は、プログラムと講演要旨集の前書き部分から構成され、大会開催のプレスリリースのために提供される。この冊子は、かつて学会誌と同封で会員に届けられていたが、今日ではWeb上からPDF版が入手できるため会員には配布されていない。一方、講演要旨集には短縮題名と発表者のみが表示された簡易版プログラムしか掲載されておらず大変中途半端な印象がある。ページ数が増加するので印刷や輸送の経費の問題があるかもしれないが、完全版プログラムは要旨集に加える方がよい。

Web上ではプログラムの変更等含めて随時最新情報に更新できるという利点もある。最近では、プログラム冊子は発行するが講演要旨集を発行せず、参加登録者に

Web 上でのみ要旨を提供する学会も出てきた。そのような学会では、参加者は関連要旨を印刷して持参するほか、タブレット端末などを操りながら要旨やプログラムを参照している。

本大会では、米国水産学会会長 Robert M. Hughes 先生、韓国水産科学会元会長 Nam Taek-Jeong 先生、世界水産学評議会（WCFS）会長 Doug Beard 先生が国際交流の一環で参加された。Hughes 先生が口頭発表をご希望との情報を国際交流委員会からいただいたので、午前のセッションの終了直後に 30 分の特別講演枠を設定した。Nam 先生には毎回の大会のようにポスター発表で参加いただいた。本学会は国際的にも認知度を増しており、特に「水産学」が科学として発展した東アジア圏の中国、台湾、韓国からの参加者も多い。また、海外からの参加者から参加（発表）証明書の発行を求められたが、事前に準備をしておらず、実行委員会で急遽対応した。

このような状況をみると、大会 HP の英語版もあった方が望ましいのではと考えてしまう。本学会の大会開催は学会 HP における大会予告（会告）によって案内し、そこから申込みサイトにリンクする形式が伝統的に使用されている。むしろ、大会 HP 上で発表申込みと参加登録を受け付ける方式に整理して運用すると汎用性が高くなり、さらに開催地の情報や展示企業へのリンクなども加えると、より有用な情報源となりうる。

口頭発表とポスター発表

口頭発表は、発表時間 10 分と討論時間 2 分としたが、熱心な討論や演者交代に要する時間のため、会場によっては進行がかなり遅れたところがあった。特に長時間発表が継続される午後には、進行時間調整のために緩衝帯の設定の必要性を再認識した。

国内外の学会ではポスターによる発表が活発に行われており、本学会でも近年ポスター発表が多くなる傾向がある。大会開催時期が大学院生の就職活動時期と重なることも一因かもしれない。本大会でもポスター発表は 260 題近くの申し込みがあり、高校生による研究発表と合わせると約 300 題となった。1 日 1 回の討論時間を設定し、1 日に 100 題ずつの発表を行うことになった。畳 1 畳分（縦 180 cm × 横 90 cm）のポスターボードをきっちりと並べたため、説明や観覧のスペースが窮屈に感じられた。通路は十分に広く確保できたが、会場の広さや経費に余裕があればポスターボードのサイズや台数を増やして貼付スペースに余裕を持たせ、1 日に午前と午後の 2 回の発表時間を設定するなどの工夫が必要であると考えられた。今回も口頭発表の時間帯と重複しないようにポスターの説明時間を設定したが、1 日 2 回の説明時間を確保するには時間帯の工夫や口頭発表との重複

の調整が必要である。

高校生による研究発表

本大会において開催した「高校生による研究発表会」では、北海道での大会にもかかわらず、九州、中国、四国地方からの参加も多く、前述のように全国から 23 校が参加し、29 題の研究発表が行われ、熱心な討論が繰り広げられた。本学会に対する全国的な認知度の高さと参加校の意気込みが感じられた。残念ながら当日欠席が 1 校あったが、授賞選考委員会で金賞 1 題、銀賞 3 題、銅賞 5 題、奨励賞 19 題を選定し、当日代表者に表彰状を授与した。

高校生による研究発表は各種分野の学会で近年盛んに行われるようになった。研究発表や受賞の経験は高校生にとって、科学に対するモチベーションの向上ばかりでなく、進路決定にも反映されるポイントになりうるほか、高校側にとっては課外活動や指導の実績として評価される。本発表会には一般財団法人東和食品研究振興会から多大な支援を賜り、運営と参加旅費の補助等に当たっているが、遠方の参加者が増えると財団と水産学会本部からの補助だけでは賄いきれなくなる。そのため、地方開催でも適用しうる旅費支給に関する明確かつ公正な基準の設定が望まれるところである。

企業展示・協賛・広告

ポスター発表と同会場では企業 11 社による展示会も行われた。ポスター会場としてのスペースを優先的に確保するため、展示スペースにあまり多くの企業に出展していただく訳にいかず、実績のある企業を中心に出展をお願いした次第である。また、企業 4 社から協賛をいただき、講演要旨集には 7 社 1 団体の広告を掲載した。他学会の運営に携わった経験上、企業展示などの企業関連イベントに対しては、企業側の年度計画の策定前、すなわち、年度が変わる前から PR に動く必要がある。より多くの企業から広く協力を仰ぐには、関連学会においても参加企業に大会開催を案内する等の営業努力が必要である。今大会では企業からの大口協賛や、函館市や公益財団法人北水協会、前掲の東和食品研究振興会からの助成もあって、無事に大会を乗り切ることができ、深く感謝申し上げる次第である。なお、公益財団法人の事業に対する寄付行為は税制優遇の対象になりうるため、企業からの協賛金の使途にも注意を払った。

託児室の運営

託児室の設営と運営についても手探り状態から始めた。大会規程には託児室を用意しなければならないことが明記されており、前回までと同様に、利用の申し出に応じて開設できるように準備を行った。ここでも、部屋の確保の問題があり、申し込み件数が多ければ、近隣の

民間保育所か幼稚園に協力を依頼することも考えた。託児室の設営場所としてキャンパス内では3箇所の候補があったが、階段が近い2階の部屋は安全上のリスクがあり、また、小会議室は会議室本来の目的に確保しておくために候補から外した。最終的に、大会本部にも近くて目が届きやすい場所として、キャリア支援室を一時的に借用してフロアにクッションマットを敷き詰め、パーティションボードで仕切りを作り、急ごしらえの託児室とした。幸いにも受け付けた幼児は2組3名、2日間の対応だったので、大きなトラブルもなく利用していただけだと思う。保育士は、函館市社会福祉協議会のファミリー・サポート・センターに派遣を要請し、センター規定の料金を大会実行委員会からセンターに支払う形とした。利用者にはあらかじめ保育士日当を負担いただく旨を会告に明示していたが、経費の一部のみ負担いただいた。

託児室の使用申し込み時期については、前回平成25年春季大会とほぼ同じ日程とした。前回大会で課題提示されたように、託児室の利用申し込み期限が大会プログラムの公開よりも早い設定となったが、事前にご相談いただいた方には、託児室利用日、時間、その他細部について保育士と綿密に打合せをしていただいた。

会員交歓会と施設見学

北海道の大会として最も充実が望まれたのが交歓会である。食の宝庫としての北海道、函館に対する期待度は当然のように高く、そのような期待に応えるために、また前回平成19年秋季大会以上の評価を得るために、大会委員長直属の特別チームを編成した。しかし、担当者の精神的負担は相当のものであった。水産物が豊富な北海道でも、3月は目玉となる魚介類が最も少ない時期であり、このことも大いに負担を増幅する要因となった。

イベント実行力と食材に関する造詣が深いスタッフが、前回の函館大会委員長（原 彰彦）をアドバイザーに加えて、食材の調達から調理法のアドバイスにまで関わり、函館国際ホテルの専門スタッフとともにメニュー作りに貢献した。交歓会では、ガゴメコンブやゴッコ（ホテイウオ）など地場の魚介類、農産物等を使用した

特色あるメニューを提供することができた。

交歓会では「ガゴメマン」と「イカール星人」のキャラクターにも登場してもらった。ガゴメマンは、函館マリンバイオクラスター事業によるガゴメコンブの生産と製品開発の研究成果から派生して誕生したものである。イカール星人はイカの主要産地としての函館観光PRキャラクターとしてインターネットを通じて全国的に話題となった。交歓会には招待者を含めて約370名の参加があったが、存分に函館の味覚を堪能できた会員情報交換の場となったものと確信している。

3月29日夕刻の交歓会に先立って、本年6月から供用開始となる函館市国際水産・海洋総合研究センターの見学会を行った。竣工前にもかかわらず、函館市企画部国際水産・海洋都市推進室および一般財団法人国際水産・海洋都市推進機構のご協力により、短い時間ではあったが、函館市がめざす「国際的な水産・海洋に関する学術研究拠点都市」のシンボル施設が全国の水産・海洋研究者に披露された。

おわりに

昨年度の春季大会の運営後記（岡田 茂：平成25年度日本水産学会春季大会運営後記—珍説イソップ物語「アリとギリギリス」part II—。日本誌 2013; 79: 919–922.）で紹介された教訓は、結果としてほとんど生かすことができず、先送りにしてしまった印象がある。本キャンパスは公共交通の便が悪いため、函館駅からの早朝のアクセス補助として臨時バスを3~4台ほど導入したが、早朝から熱心に出席する参加者が多く、満員で乗り切れないほど殺到することになった。これに関しては予想が外れ、大変恐縮している。このことを除いて、特に大きなトラブルもなく、大会の全日程を終えることができたのは、参加者のご理解とご協力によるものである。雪融け直後の土埃が舞い、花の季節には遠い北海道に来ていただいた皆様に心から感謝申し上げる。大会初日には目立っていた残雪の塊も日に日に小さくなり、最終日にはほとんど融けてなくなった。北海道の春を少しでも楽しんでいただけたのなら幸いである。